

伝えたい、あの戦争の記憶を 記憶、つなぐ。

太平洋戦争の終結から73年。その時代に生きた人たちは、それぞれに過酷な運命に立ち向かったことでしょ。戦争体験者の話を聞ける機会は年々減っていきます。だからこそ、少しでも多くの記憶(体験談)を残していくことが大切ではないでしょうか。今回は戦争体験者の2人にお話を聞きました。

国からの洗脳。戦争は悲惨

徴

兵検査甲種合格。集合は東京で下関から北朝鮮に渡った福田さん。「入隊先には貨物列車での移動でした。真っ暗な車両の中にわらだけ。家畜扱いみたいでしたよ」と振り返ります。

北朝鮮へ渡った後は、3か月の軍からの教育が始まりました。「教育隊」として、午前は飛行機の学科、午後には教練、軍隊の基本を叩き込まれました。徐々に、命令は絶対という考え方に変わりました。一種の洗脳なのかもしれませんね」と当時つらかった3か月の記憶がよみがえります。

「そこからは行き先も知らされず、女界灘を長い時間船に乗ったのを覚えてます。正直、どこに行くのか不安でした。生きて帰れるのかも分からないまま、3日間。ですが、着いた先は下関でした。ほっとしましたね」と当時の心境を語ります。

着いたのもつかの間、夜中に移動し京都の宇治へ渡った福田さんたちの部隊。「飛行場での訓練でした。飛行兵たちは赤とんぼ練習機(※1)で、後ろにドラム缶を積み、上陸用舟艇に特攻する練習をしていました」とそこでの記憶を語ります。このとき昭和20年5月でした。戦況が悪化していた日本。福田さんは熊本で終戦を迎えます。



(※1)九五式一型練習機(通称、赤とんぼ)は日本軍が練習機として使用していた機体。主に、訓練生が練習時に離着陸や旋回などの練習に使用。また、特攻機として使用されたことも。(写真はイメージ)

怖い、怖い、とにかく怖い

苦

「7人きょうだいの長女で、家事や農家の手伝いをしていました。しかし、すぐにお兄さんも出征。齋藤さん一人でお兄さんを見る日々が始まりました。

「食べ物も着る物も配給。農家だったので、米はありましたが、供出制度で政府に取られてしまうので、隠したこともありましたね。服も良いものは着れなかったしね」と話します。当時の日本は戦争真っただ中、食べ物も着る物も国から統制され、何も無い時代だったそうです。

B29の姿が見える日もありました。空襲警報が嫌な音でね。あの音を聞いたときは家の横の防空壕にすぐに逃げました。両親やきょうだいを避難させ、最後は馬を引張って木の茂みに隠しては、私も防空壕に逃げ込みました」と話し「ですが、食料や水を運ぶのは私の役目でした。恐ろしい気持ちと必死にこらえて、家から物を運びました」と怖かった記憶を振り返ります。お兄さんの出征後はきょうだいの中で一番上となった齋藤さん。おびえる体を突き動かしていたのは責任感だったそうです。

今でも思い出す爆撃の音。その時の記憶を「とにかく、怖いよ。飛行機が下がって来て、すぐそこに見えたからね。パイロットの顔が見えるくらい低かったね。見つけてすぐに、身を隠すと、バリバリバリって機銃掃射の音が聞こえてね。本当に怖ろしかったね……」と状況を思い出し、語

INFORMATION

戦没者追悼式

町では、戦没者追悼式を開催します。遺族や関係者をご参加ください。

- ▶ 期日 8月21日(※)
- ▶ 時間 午前10時～
- ▶ 会場 中野公民館(旧邑楽町公民館)
- ▶ 問合先 役場健康福祉課 ☎47-5024

EVENT

第35回邑楽町平和展

- ▶ 日時 9月15日(土)・午前10時～午後2時
- ▶ 会場 中央公民館
- ▶ 内容 特別展示『紛争地や貧困に暮らす人々の写真展示』やスタンプラリー、戦時食無料配布、映画上映、絵本読み聞かせ、特別講演会など
- ▶ 問合先 平和展実行委員会事務局 役場住民課(水野) ☎88-5511



イベントに参加して、平和についても一度考えてみませんか

Interview

今年で35回目を迎える平和展は、初めて中央公民館で開催します。今回は平和のために活動している人たちの紹介や戦時中の食事を再現した戦時食の無料配布、戦争をテーマにした映画の上映、平和の願いを込めた風船飛ばしなどを行います。また、飲食ブースやぐんまちゃんのグリーティングも予定していますので、子どもから大人まで楽しめる内容をご用意しています。ぜひ親子で来場して平和についてお子様と一緒に考える機会にしてみてください。世界中のどこかで今でも戦争が行われています。これからもこのイベントが戦争を体験していない世代に向けて『平和であることの幸せ』を発信できる機会になっていければと思います。



▶ 平和展実行委員会 実行委員長 廣田雄紀さん

かかったですが、度々グラマン機が機銃掃射を行っていました。あの音は、今でも恐ろしいですね」と当時を振り返り、終戦のときのことを「終戦を聞いたときは放心状態でした。国のために戦ってきた私にとっては……」と言葉を濁します。



陸軍整備隊として、戦争体験者の福田さんに聞く

INTERVIEW

福田 晃さん (鶴下・13区)

●1923年生まれ。足利市で生まれ、13歳のときに邑楽町へ。16歳のときに、中島飛行場に就職。その後、徴兵検査甲種合格、陸軍で飛行機の整備を務めた。

気を強めます。そんな齋藤さんにも心の支えがありました。それは千人針だったそうです。弾が当たらないように、千人針を何度も縫ったね。寅年だから、何回縫ってもいいからね。こういうものにすがるとか無かったからね」と話します。



つらかった戦時中、日本での戦争体験を齋藤さんに聞く

INTERVIEW

齋藤 三好さん (西ノ根宮内中島・24区)

●1926年生まれ。旧姓は秋元。坪谷の大農家の長女として5人の妹や弟の世話、農家の手伝いをしていた。